

2025年1月13日(月・祝)  
津図書館 2階視聴覚室

514-8611 津市西丸之内23-1 津リージョンプラザ内

第1部

トーク

ぼくが絵について思うこと

13:30 ▶ 14:35 定員50名

第2部

ワークショップ

みんなで絵を描いてみよう!

14:50 ▶ 16:30 定員30名

- ✿ 1ポーズ10分の人物デッサンです
- ✿ 鉛筆 (B~4Bの濃さ)、消しゴム所持参
- ✿ 紙と画板はこちらで用意します

対象

小学生以上 (小学生は保護者同伴)

申込

12月2日(月) 9:00より  
申込フォームか、電話で  
受け付けます

津市津図書館  
電話 059-229-3321



Design by Akabae Haruna and Kusaka Junichi

# ぼくは絵が好きです

伊野孝行

津市出身イラストレーター

トーク&ワークショップ

エテレ「オトナの一体さん」「昔話法廷」や  
書籍、雑誌、絵本などで大活躍の  
伊野孝行が故郷に凱旋!  
絵とイラストレーションを中心に「描くこと」の  
楽しさを語り、その核心に迫る世界を広げます!!



自作「ソホの肖像」を見る伊野孝行





P1 チラシ・表  
P2 チラシ・裏



# ぼくは絵が好きです

伊野孝行 津市出身イラストレーター  
トーク&ワークショップ



伊野孝行自画像

伊野孝行 Webサイト



**伊野孝行** いの・たかゆき  
1971年三重県津市生まれ。セツ・モードセミナー研究科卒業。講談社出版文化賞、高橋五山賞、グッドデザイン賞を受賞。Eテレ「オトナの一体さん」「昔話廷」などの作画を担当。著書は「となりの一体さん」(春陽堂書店)、「画家の肖像」(ハモニカブックス)ほか、共著に南伸坊氏との対談「いい絵だな」(集英社インターナショナル)絵本の共著に「おしらせさま」(汐文社)、「ふりかけのかぜ」(福音館書店)などがある。



- ①「たけしの面白科学者図鑑」文庫本カバー 新潮社 2017年
- ②「山田邦子の愉快にこうよ」挿絵 日本農業新聞 2024年
- ③「婦人倶楽部 君にやわらぎ」レコードジャケット Staghorn Records 2023年

2025年1月13日(月・祝)  
津図書館 2階視聴覚室  
514-8611 津市西丸之内23-1 津リージョンプラザ内

**第1部** トーク  
ぼくが絵について思うこと  
13:30▶14:35 定員50名

**第2部** ワークショップ  
みんなで絵を描いてみよう!  
14:50▶16:30 定員30名  
★1ポーズ10分の人物デッサンです  
★鉛筆(B~4Bの濃さ)、消しゴム要持参  
★紙と画板はこちらで用意します

**対象** 小学生以上(小学生は保護者同伴)  
**申込** 12月2日(月)9:00より  
申込フォームか、電話で受け付けます  
津市津図書館 電話 059-229-3321



**伊野孝行** いの・たかゆき  
1971年三重県津市生まれ。セツ・モードセミナー研究科卒業。講談社出版文化賞受賞。著書は「となりの一体さん」(春陽堂書店)、「画家の肖像」(ハモニカブックス)ほか、共著に南伸坊氏との対談「いい絵だな」(集英社インターナショナル)絵本の共著に「ふりかけのかぜ」(福音館書店)などがある。



Design by Akabei Harano and Kasuka Jurichi

# ぼくは絵が好きです

伊野孝行 津市出身イラストレーター  
トーク&ワークショップ

Eテレ「オトナの一体さん」「昔話廷」や書籍、雑誌、絵本などで大活躍の伊野孝行が故郷に凱旋!! 絵とイラストレーションを中心に「描くこと」の楽しさを語り、その核心に迫る世界を広げます!!

伊野孝行さん  
津図書館トーク&ワークショップ  
チラシのデザイン

オリジナル  
Originally December 2024 36

ております……」とのこと。  
それはマズい（Kさんはちっとも悪くないですよ）。故郷には錦を着て帰らねばならぬのだ。ネット時代、来客数に限りはあっても情報は世界を巡る可能性がある。『オリジナリ』にノーギャラで原稿を描いて3年近くなるか。頼まない手はない！

BGXの良いところは、デザインだけでなく編集者の目線も常に入っているところだ。今回も「ぼくは絵が好きです」というタイトルやその横のコピーなどにもアイデアをいただいた。ワークショップも最初は「デッサン会」としていたのだが、おかげで随分と人が来やすい感じになった。募集開始から3日で定員に達したのは、SNSの拡散もあるが、やはりデザインによって伝わったニュアンスが大きいと思う。

**津** 出身の同世代で著名な作家といえ  
ば、映画にもなった『浅田家』の  
写真家、浅田政志さんと夫婦の絵本ユニ  
ット、tupera tupera（ツペラ ツペラ）な  
どが思いつく。おそらくこの二組はずで  
に津で講演会や展示をしているはずだ。  
「こういう人もおるんやで」と津市の職  
員をしている同級生がしつこくロビー活  
動をした結果、私も津出身の文化人に選  
ばれました。

50年以上も生きていればこれはズル  
ではないとわかる。むしろこうやって実  
績は作られていくのだ。次に目指すのは  
三重県立美術館での展示か……。

それはさておき、チラシやポスターは  
地元のデザイナーが作ってくれるのだろ  
うか。図書館の担当者Kさんに聞いてみ  
たら「予算がございませんので、わたく  
しが無料アプリ等を駆使して毎度作成し

結局は無料… 伊野孝行 イラストレーター

メモランダム本のデザイン  
**金子兜太句集 その2**  
（風発行所/1961年）  
**日下潤一**

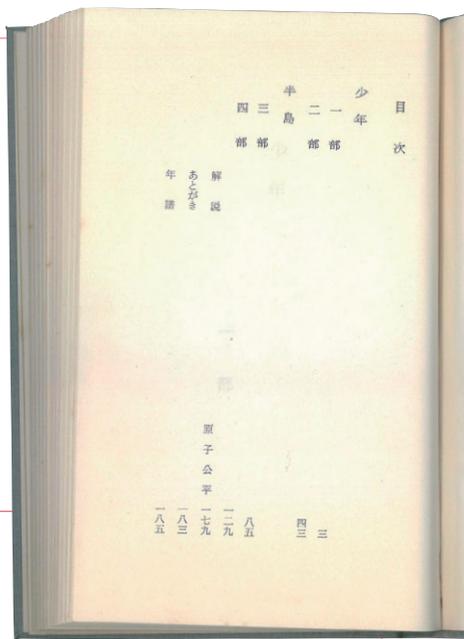
**函に** 「現代俳句新書 I」とあるが、

その後このシリーズは続いたの  
か。この本は新書判で、本文サイズは左右  
106ミリ、天地168ミリ。標準的な  
新書サイズは105ミリ×173ミリ。

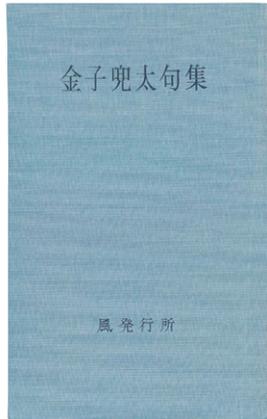
表紙のチリの分、天地を短くしているのだ  
ろう。新書判というハンディで小さな判型  
の句集は、意外な印象。簡素だが、品があ  
る。表紙にはチリがある。薄いボール紙に  
布貼り。文字は茶色の箔押し。スピゲがあ  
り、これも茶色。見返しはクリーム色の厚  
手の紙。本文用紙は薄い柔らかい紙で、ペ  
ージが気持ちよく開く。薄いが気になるほ  
ど裏うつりはない。

目次が面白い。極端に項目とノンブルを  
あけている。こういう意識は誰のものだろ  
うか。金子兜太か版元の沢木欣一か。本文  
の組版もふくめて（部の扉、俳句、あとが  
き、年譜、奥付）とても体裁に気が配ら  
れている。

本文は1ページ五句組天地揃え。本文の



上右 目次/上左 表紙



句は均等アキでページの半分くらい。まず  
これにおどろく。地のアキが74ミリ、句の  
天地が74ミリと同じ。天は20ミリアキ。  
使われている金属活字の書体が気になる。  
五号。古いタイプデザイン。東京築地活版  
製造所のものに似ていると思ったので、近  
代日本語活字史を研究するの内田明さんに

ブレンド型が出回りやすい環境があったの  
かと想像します。1960年代までの活版  
印刷所では、自社活字を開発するところ以  
外は、主要取引先の活字屋の書体を、サイ  
ズが揃えば何の疑問も持たずに使っていた。  
むしろ選り好みせずに使わざるを得ない状  
態。取引先の活字屋が秀英五号や  
後期築地五号といったブレ  
ンド型の五号活字を鋳  
造販売していた

たずねてみた。

（この本使われている活字  
は大正か昭和になってから  
のものか、9割方は築地活版  
製造所か秀英舎、1割は正体  
不明の書体の活字。かつて、  
森川龍文堂の昭和10年代の見  
本帖は「五号明朝中太型」と  
して秀英五号を、「五号明朝  
細型」として築地五号を掲載  
している。こういう不思議な

状況は、仕入れている印刷所の五号は混植（ブ  
レンド）になる。自家鋳造していた印刷所  
でも、特別の注文をせず「一式」で母型屋  
から仕入れたら、その母型がブレンド型の  
セットならば混植になるでしょう。）

これまでこの連載で、戦後の古い本（す  
べて金属活字）を見てきたけれど、どうし  
て本文の活字書体に気を留めずにきたのか  
活字研究者でタイプデザイナーの小宮山博  
史さんによると、活字屋さんたちは書体の  
良し悪しには敏感だという。それは自分達  
が作る活字にいかすため（無断でよそのデ  
ザインを盗用する）である。活版印刷の大  
手の印刷所は自前の書体の活字をもってい  
た。岩田母型は戦後のベストセラーのベン  
トン彫刻機による明朝体を作っている。私  
のような、そういう「メジャーな」活字書  
体に慣れてきたものにとっては、内田さん  
に説明していただいた所謂ブレンド型には  
目がいってなかったのだろう。今回は本文  
の説明をしておきながら、図版を掲載する  
スペースがなくなりました。次回に本文の  
デザインとブレンド型書体を見せます。



表紙と函



表紙の小口  
（チリ）

れている。二十代の頃にはその文体におっせいかいさを感じて読了できなかったというのに、わたしもやっと「人」になったということか。

グラビアで見る田辺邸はロココ調。華やかなシャンデリアに猫足ソファ。花柄、レース、リボン、ポップリ、人形、ぬいぐるみに溢れており、そのどれもにも興味のないわたしだが、おせいさんにはよく似合っていて好感を持つ。何と言っても、どうかしているほどスヌーピーを愛する姿、その笑顔には思わず目尻が下がってしまう。おせいさんは実にかわいい人だ。

「人、中年にして、はじめて人たり」とおせいさんは言う。

おせいさんの「中年もの」の登場人物の年齢は三十代後半ぐらい。わたしの実感よりもすこし若いけれど、時代を鑑みるとそんなものだろう。

わたしが「田辺聖子」を味わえるようになったのは四十代、『春情蝸の足』を読んでから。中年男女のときめきと悲哀をユーモアたっぷりに描いた短編集は、おでん、すきやき、たこやき、お好み焼き、きつねうどん、大阪ならではの味が主役とも言える。背中をそっと撫でてもらったような温もりがあり、肌寒くなると読みたくなる一冊だ。何よりこの本に出てくる中年男のいじましく健気なことよ。色とりどりに情けなくて、身をよじて笑ってしまう。人生の滋味とほろ苦さ。軽やかであたたかい人間讃歌が大阪弁でいきいきと描か

## 霜田あゆ美 Portrait of My Love 短期連載

下

おせいさん  
と  
スヌー



しもだ・あゆみ 1967年、神奈川県生まれ。イラストレーター。画材店に勤務後、2000年より絵の仕事始める。2025年がどんな年になるかわかりませんが、のんびりやっています。

## N'S COLUMN

38

# 西岡琢也 大森一樹の置き土産

DVDを差し出して、「これ、観といてくれや」

大森一樹はいつものようにぶつきら棒に言った。『ふんどし医者』とあった。

江戸末期の時代劇。1960年東宝作品。中野實の戯曲を菊島隆三が脚色。監督稲垣浩。主演森繁久彌、原節子。長崎で蘭方を学んだ二人の医者（森繁と山村聡）が江戸へ帰る途中、大井川で川止めに遭い、そこで住人を治療した森繁は市井の人の医者になると留まり、山村は江戸へ向かう。山村を追って来た原は森繁の決断に惹かれ、妻に収まる。原は博打好き。負けると森繁が着物を脱いでふんどし一つになり、金を作る。人呼んで「ふんどし医者」。

母校の京都府立医大が創立百五十周年の記念事業でコンペをやるのでこの企画の映画化で応募したい、ついでにはお前に脚本を頼みたいと大森は言った。僕は聞き流した。以前の仕事で脚本を大幅改変され、二度と仕事するま

いと決め本人にも言っていた。しばらくして珍しく大森が興奮気味に、あの映画企画がコンペの最優秀賞を獲った、ついでには早速お前に脚本を……と言うので「自分で書けよ」と返した。数日してついでにはお前に……とまたしつこく言うので、途中で今回は改変厳禁と釘を刺す、それでもいじるならさつさと降板しようと思え、調べもの（面倒くさいが楽しい。大森は多分苦手）を始め、第一稿を書き上げた。

元ネタにあるヤクザ者（夏木陽介）が喧嘩で刺された腎臓の摘出手術を森繁が行い、その夏木が稼業の足を洗い医者を目指して長崎で学び、医者になって帰ってくるという大枠のみ残した。（ふんどし）の趣向はカット。

余談ですが、森繁は相変わらず達人者な好演だが、原は明らかにミスキャスト（僕がこの人、苦手なものもあるが）。原節子に博打場も、負けてふんどし一つの森繁と並んで帰るのも似合わない。

第一稿を読んで大森は手放して褒めてくれ、これから府立医大が協賛金を集めるから、目処がついたら準備を始めるぞと意気込んだが直後、新型コロナウイルスに全世界が襲われた。当然金集めどころではない。三年の空白の間に大森が急逝した。金が集まらず潰れた映画は山ほどあったが、監督がいなくなるなんて初めてだ。驚いた。

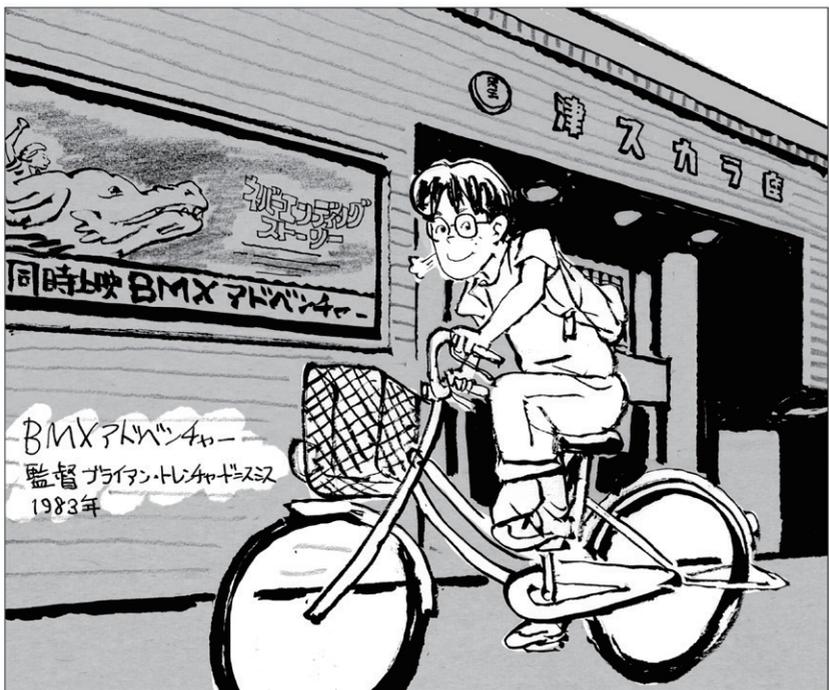
やっとコロナ騒ぎが終息、大森一樹のために書いた『幕末ヒポクラテス』と名付けた第一稿だけが残った。大森の旧知のプロデューサーに相談、「吊い合戦」をやろうと再始動した。監督は大森の盟友、緒方明が引き受けてくれた。とは言え先立つものは金で、府立医大も協賛金集めを再開、何とか製作費の目処も立ち、めでたく十一月下旬にクランクインの運びとなった。物語の舞台を大井川から京都に移し、後半は新撰組、鳥羽伏見の戦いも絡めた。

主演佐々木蔵之介。内藤剛志、真木よう子、藤原季節ほか。大森の『ヒポクラテスたち』（80）の生き残り、柄本明も出る。伊藤蘭も……出るかなあ。

公開は25年11月の予定。僕にとっては13年ぶりの映画作品になる。

内藤が、今回が映画の遺作になると言っていたそうだが、僕も似たような思いでいる。お互い歳取ったね、内藤さん。

にしおか・たくや 1956年、京都府生まれ。脚本家。代表作に『ガキ帝国』『TATTOO（刺青）あり』『沈まぬ太陽』『はやぶさ〜遙かなる帰還』、TVドラマ『京都迷宮案内』シリーズ、「返還交渉人」など。



BMXアドベンチャー  
監督 グライマン・トレンチャー  
1983年

続

# ぼくの映画館は家から五分

34

伊野孝行

今 月は巻頭特集に合わせて子どもの頃に「津スカラ座」で観た映画を。(20年以上前に閉館。調べるとまだ建物は残っているみたい。帰ったら行く)

小5の時に家族で観に行った『ブッシュマン』は同時上映の『新Mr.Boo! アヒルの警備保障』の方が面白かった。中1の時に友達と観た『ネバーエンディング・ストーリー』も抱き合わせの『BMXアドベンチャー』の方が断然面白かった。どっちも期待しないで観たからか、とにかく興奮冷めやらず帰りはママチャリでBMX風にワイリーなどしたと思う。

40年ぶりに『BMX...』を観た感想を述べます(U-NEXTで配信)。まず驚いたのはヒロインが16歳のニコール・キッドマンだったこと。しかもオーストラリア映画。ニキビ面男子の二人組が彼女と共にBMXに乗って銀行強盗団をやっつける話。全く覚えてない。強盗団が改造したトランシーバーを、たくさん手に入れたことから事件に巻き込まれるが、無線の会話は警察に筒抜けで工事現場でも混線して、前半は脚本が面白い。トランシーバーのアンテナがギャングの目に刺さるシーンに爆笑。中盤からの強盗団との追いかけてチェイスが長くて欠伸が出る。もつと筒抜け設定を活かせばよかったのに。子どもの頃にしか出会えないキッズ映画だった。確かにいつか思い出を壊してしまった。

いの・たかゆき 1971年、三重県生まれ。イラストレーター。第44回講談社出版文化賞、第53回高橋山賞。著書に『画家の肖像』『となりの一休さん』などがある。テレビアニメに『オトナの一休さん』。最新刊は南仲坊さんとの対談本『いい絵だな』。

漱

石の小説の主人公「坊っちゃん」は、明治三十八年(一九〇五)夏、二十三歳で物理学校(のち東京理科大学)を卒業した。卒業間もなく、物理学校の校長が推薦してくれて、四国の中学校の数学教師として赴任することになった。月給は四十円だという。

「坊っちゃん」は東京・牛込辺の地主の次男直情径行で人にせられやすい性格の青年だが、漱石の「猫」とおなじく名前はない。赴任先は四国の「二十五万石の城下」(実際は十五万石)だが、地名を明らかにしない。

坊っちゃんの父親は明治三十五年初め、卒中で死んだ。母親はそれ以前に死んでいる。「愛されざるの子」であった彼は、色白で美男、芝居と英語の好きな兄とも不仲で、女中の「清」だけが味方であった。清は「互解」以前には「由緒ある家」の娘であったらしいが、いまはもう「ばあさん」である。清と坊っちゃんは、いわば「反近代」で結ばれた仲であった。

父が死んだ年の夏、東京高等商業(のち一橋大学)を卒業した兄は貿易会社に就職した。その九州の支店に赴任する前に「坊っちゃん」の下宿を訪ねた兄は、以後いつさい面倒は見ないと念を押したうえで、六百円くれた。それは美家の家屋敷を処分した金の一部であった。兄はさらに五十円出し、これは清にやってくれといった。

六百円は現在の購買力では六百万円程度、

その六百円をどう使うか。

一人で世の中を渡っていくには教育と資格が必要だ。専門学校の年限は三年だから、六百円を三で割って二百円、三年間は勉強できる。では何を勉強するか。文学以外ならなんでもいいやと思いつながら、たまたま通りかかった飯田橋の物理学校が生徒募集していたから、その場で入学願書を出した。これも「親譲りの無鉄砲」のせいだと坊っちゃんはいうが、地主で「何もせぬ男」であった父親は「無鉄砲」とはもつとも遠い人であった。

物理学校は東大工科大学の卒業生がボランティアで始めた学校で、志望者は全員入学させる。だが、進級・卒業の厳しいことで知られていた。自分の成績は下から数えた方が早かった、と坊っちゃんはいうが、明治三十五年入学の同期二百八名のうち三年で卒業できたものは二十五名だけ、坊っちゃんはそのなかにいた。

四国は遠い。汽車と船で三日かかった。港に着き、そこからおもちゃのような汽車に乗って旧城下へ。飛び込んだ旅館では、満員だといつて、坊っちゃんに階段下の暗い部屋を

関川夏央 昭和残照

二十八

# 「坊っちゃん」の月給①



坊っちゃんのモザイク

→ 弘中又一

あてがった。

時は九月初め、やたら暑い。風呂に入った帰りに見ると、涼しげな部屋がいくつも空いている。足元を見やがった。腹を立てた坊っちゃんは、相手を恐れ入らせてやれ、と「茶代」(帳場へのチップ)を五円やった。五円は五万円とみてよい。余裕のあらわれではない。たんにあと先を考えないのである。

東京を出るとき、坊っちゃんの手元には六百円の残りが三十円があった。四国までの旅費に十六円使った。そこから五円出したら、もう東京には帰れない。しかし月末には四十円の月給をもらえるのだから構うものか、と見栄を張った。そんな坊っちゃんに、旧制中学の教師が無事つとまるだろうか。

せきかわ・なつお 1949年、新潟県生まれ。作家。代表作に『海峡を越えたホームラン』(双葉社/第7回講談社ノンフィクション賞)『坊っちゃん』の時代』(双葉社/谷ロジローと共作・第2回手塚治虫文化賞)、近著に『人間晩年図巻』シリーズ(岩波書店)。

水木しげる  
『河童の三平』全5巻  
講談社コミックス / 1986年



小学5年生の時に会って以来の心のマンガ。それまで知っていた「コロコロコミック」のマンガとは、およそ異質な世界だった。自分の趣味嗜好の源流。以降、繁華街の書店や古書の通販で鬼太郎、悪魔くんはじめ朝日ソノラマの短編集など買い、高校生になると市販されていない籠目舎「水木しげる叢書」などの復刻本を予約購読する水木ファンになっていったが、その頃も今も一番好きなのは三平。鬼太郎、悪魔くんは人智を超えた能力を持つヒーロー的存在だが、三平はとりたてて特殊な能力を持たないお人好しの少年。そこがいい。山奥におじいさんと暮らしていたが、ひょんなことから河童と知り合う。たぬきや死神とも交流。彼らとの絶妙なやりとり、おかしみと寂寥感、水木さんの田舎の暮らしへの憧れが込められた牧歌性がたまらない。名シーンとして挙げる人の多い、おじいさんが死神に連れ去られひとりぼっちになった三平が家でぼつんと寝そべるシーンは、小学生のボクにも沁みた。終盤では三平自身が死んでしまう（三平は死後、人からは言葉も姿も聞こえず見えない魂として点線で描かれ続ける）。主人公がかくもあつげなく死んでしまうことにも驚いた。それまでのボクが知るマンガにおいて、死はこの上なくドラマチックな悲劇だったはずなのに、いささかもそうではなく、淡々とブッキラボーに描かれている。そのドライさをとても貴重に思う。

日日読書  
大西良貴

33

**弊** 店のかつてのご常連Nさんは、七十がらみ男性、嵯峨育ち、五条坂の陶器店店主。本を買うのが好きでたまらない様子でよく通って下さった。一度だけNさんの店にお邪魔したが、バックヤードには陶器より本のほうがたくさん積み上げられており「これじゃ何屋かわからんね」と苦笑されていた。二万冊を超える蔵書の中からよく売っても下さった。それらの本はかけだしの古本屋には勉強になった。興味を惹かれた本は自宅に持ち帰ることも。Nさんの本で知り好きになった書き手は、小沢昭一、神吉拓郎、出久根達郎。古本屋さんが書いた本は好んで読んでいたのに、その代表格たる出久根さんを読んでいなかった。Nさんが売ってくれた『漱石を売る』『いつのまにやら本の虫』らはいずれも面白く、自分でも出久根さんの本を買うように。本書はその最初の一冊。古本のみならず、久世光彦、池内紀らの新刊、ボクも定期購読していた「彷彿月刊」のこと、自分の読書生活のことなど。取中車谷長吉『漂流物』の評あり。車谷氏の文業を、誰もが持っている「コンチクショウ」の世界」だとし、通常それを露わにするのは生々しく汚い表現になるところ、車谷氏の文章は清冽だという。出久根さん自身とはまったくタイプの違う作家への評に感じ入った。

Nさんはやがて西院のほうに引っ越され、めったにお越しになることはなくなった。先日久々お見えになった時、変わらぬ本への興味と、親子ほど年の離れた自分への物腰の柔らかさに、こういう人のおかげで店を続けていられるのだと実感した。



出久根達郎  
『古本・貸本・気になる本』  
河出書房新社 / 2004年

**憧れて** はいたが、作家（小説家）は「一行の推敲に数日かける」と何かで読んで、いらちの自分には無理だとあつさり諦めた。しかしその初志への未練からか、作家の回顧録や評伝、編集者の交遊録は好んで読む。創作の裏話や出版の内幕に興味をそえられる。

日下潤一兄が招待券をくれたので、駒場・日本近代文学館の「編集者かく戦へり」展へ行った。作家と作品の回顧展はよくあるが、編集者から見直すと言う企画は面白い。中でも切りをめぐる編集者と作家の手紙に目を惹かれた。

成瀬巳喜男『放浪記』（62）に売れっ子になった林美美子（高峰秀子）邸の応接間で、大勢の編集者が愚痴りながら原稿を待つシーンがあった。作家って中々書かないんですよ。売れたら何本も掛け持っているから書けない。売れてなくても「推敲に数日」だから書けない、書かない。よって編集者

はいつもイライラ、入校日は睨んでハラハラドキドキする。因果な商売ですなあ、まったく。

展示された手紙の攻防を眺めると、編集者の督促の手紙の字が大きい。反対に言い訳

## 西岡琢也

### 正解はあるのか

する作家の字は小さい。両者の力関係が如実に出てますねえ。

手書きの小説の生原稿、ゲラも多数展示されているが総じて作家の字は小さい。あの骨太な作品の多い吉村昭の字が、神経質そうで小さいのには驚いた。

推敲の痕跡が残る原稿が多い中で圧巻は、中上健次『岬』（76）のゲラ原稿の山だ。編集者高橋一清の執拗なダメ出しに、新人中上が直しを繰り返す修羅場が垣間見える。ゲラの方々に細かい指摘や疑問点、具体的に言葉の変更を指示する高橋の字が所狭しとある。よく我慢したね、中上も。

いつか信濃大町に中篇小説の映画化権をもらいに行ったら丸山健二が、文芸誌で中上と対談した時の話をしてくれた。雪深い旅館の二階で対談中、水割りや飲んでいた中上は、軒の庇のつららを氷代わりにグラスに入れるから取ってこいと若い編集者に命じたと言う。人気作家になって「江戸の敵は長崎」だね。ホントは高橋一清にやらせたかったんだろうなあ。

『岬』のゲラを眺めていて、高橋秀実（急逝には驚いた！合掌）の新刊『ことばの番人』（集英社インターナショナル）を思い出した。校正者の仕事をいつもの「秀実節」で追ったノンフィクションだが、中でベテラン校正者が「日本語には標準表記がない」「正書法」がない極めて珍しい言葉」と話す。

（日本語の）漢字仮名交じり文という形態は、漢字や漢字から派生した仮名の交じらせ方に公式な正解がなく、だからこそ校正者が必要になってくるのだ。

秀実は書く。そして「本気で校正すれば、間違いは絶対見つかります」と校正者は断言する。日本語は「正解のない言葉」と言われると、何だか居心地が悪い。

脚本の世界では以前から、監督やプロデューサー、スタッフ、俳優（最近では俳優事務所社長とかマネージャーも）が隙あらば脚本を弄ろうとする。いつも頭から湯気を出して抵抗するが、「正解のない言葉」を使っていいと言われれば納得もする。脚本は何度でも改稿出来る。どこで納得、諦めるかだ。

所詮なべて世の中はそれぞれ個々人の（物差し）の戦いなんだと改めて気付かされた、駒場の日でした。

おおにし・よしとか 1974年、京都府生まれ。京都嵯峨嵐山にある古書店 London Books店主。文芸書を中心に、人文書、美術書、絵本、サブカルチャーなどを扱う。観光客と地元の人に支えられ営業を続ける。

London Books  
616-8366 京都市右京区  
嵯峨天龍寺今堀町22



「編集者かく戦へり」会場入口 (写真提供 日本近代文学館)

## 当館

には元々、滝田樗陰、坂本一亀(子息は坂本龍一)ら編集者旧蔵の、大型資料コレクションがあります。くわえて近年、坂本忠雄(新潮社)、橋

中雄二(講談社)といった編集者の旧蔵資料を立て続けに受贈したことが契機となり、「これらをうまく融合し活かすことはでき

## 展示担当者かく語りき

日本近代文学館 石川賢

ないか?」ということが、そもそもの企画の発端でした。

実際の展示では、作品誕生の裏側にある作家と編集者のやり取りを、書簡資料を中心に紹介。原稿催促の攻防、書き直し、泣き言、果てはお金の前借りまで……。ある程度、テーマに則し分類することを試みましたが、「安易な分類で、作家の姿をおもしろおかしく切り取るようなことは避けたい」というのが、展覧会編集の武藤康史先生がもつとも危惧されたところでした。

私の実務作業面での苦労話でいえば、登場作家がとにかく多く、そのほとんどは著作権保護期間内ということ。展覧会の準備期間中は、ほぼ著作権許諾申請に労力が費やされたと言っても過言ではありません。

アンケートでは、やはり編集者の苦勞・努力について寄せられる声が多く、「編集者」という仕事に寄せられる関心の潜在性のようなものを感じました。また一度に、色々な作家の直筆が見られることも好評だったようです。第2弾開催希望や、「校閲者かく戦へり」もやってほしいという声には、大きな励みとなりました。

以上、展示担当者かく語りきでした。

## 今月のあとがき

東京の不動前のフラヌール書店、京都のウンベルトとロンドンブックスに毎号10部ずつ置かせてもらっている。フラヌールのご主人から、お店の向かいの高校の先生がいつも持っていかれると聞く。毎年使っている、卓上日めくりカレンダー「page・a・day gallery calendar DOG」(N.Y.)の2025年版はケースがプラスチックから紙製に。11月、帯状疱疹に罹って3週間禁酒。『撮るあなたを撮るわたしを』大山頭が面白い。「探検ファクトリー」の春日井の椅子工場。おなじみの折りたたみパイプ椅子を作った。今やそのデザインにはビンテージの風情がある。最近のオフィスの椅子がなぜよくなったのかわかる。(日下)



E.Mori

霜田あゆ美さんの短期連載2回目。笑顔の田辺聖子さんの絵、こちらも思わず笑顔になってしまう。来年、40歳になる私、そろそろ「中年もの」が楽しめるかもしれない。お正月休みは『春情蛸の足』を読んでみようか。お正月に読みたい本はもうひとつ。不動前のフラヌール書店へ、本誌35号を届けにいった時に購入した『編むことは力』(ロレッタ・ナポリオーニ 訳=佐久間裕美子/岩波書店)。趣味で編み物にはげんできたが、編み物がフェミニズムや社会運動を支える重要な活動だとは知らなかった。編み物の一番良いところは、間違えたら何度でも編み直せるところ。(赤波江)

2024年12月15日発行 <ロゴデザイン>ヨコカク <編集・デザイン>赤波江春奈+日下潤一 <印刷・製本>グラフィック <発行>ビーグラフィックス ©B GRAPHIX 2024, Printed in Japan 【無断転載禁止】 お問い合わせ=akabae@bgx.jp

◆Web=bgraphix.com ◆Twitter & Instagram=@bgx\_book\_design ◆日下潤一のプログ=www.bgx.jp/blog/「オリジナリ」はBGXが毎月発行するフリーペーパーです/100部発行

◆ロンドンブックス(京都・嵐山)ウンベルト(京都・夷川)フラヌール書店(東京・不動前)に10部ずつ、古瀬戸珈琲店(東京・神保町)に5部、置いてます

30 年ほど前に買ったちくま文庫『鬼太郎夜話』は「ガロ」での連載をまとめたもので、お金や女の子に弱くタバコをくわえたりするちょっとひねた鬼太郎を見ることができる。

私のうちにはその本を夜な夜な枕元に置いて読んでいた児童がいた。

その娘に調布の「ゲゲゲのスタンプラリー」に誘われてついていった。

実は深大寺は生まれて初めて。国宝の白鳳仏も見ることができ、水木さんのお墓にお参りもした。

その次の週はやはりゲゲゲのイベントをやっている西武園ゆうえんちへ出かけた。

(調布のスタンプラリー参加者は割引になる。私もせいのだ。)

ここへ来たのは小学校の遠足以来。

今、誰もがスマホで写真を撮る。私は一応デジタルカメラで写真を撮る。

家族の写真を撮る時、「そこに立ってみて」と言う。背景とか雰囲気も残したいと思う。

古い遊園地、子供の自分が来た場所、30年前は幼い子供だった人、それを撮っている自分、数十年後には私はいない、もっと後には子供もいない、などうっすら考えている。

職業カメラマンになる前も、ずっとこんな感じで写真を撮っていた。

自分はただ写真を撮るのが好きな人なのだ。

この写真に何の意味があるか。

記念写真と言うにはちょっと時間のかかる撮影に付き合わされる家族はどう思っているのだろう。

とりあえずLINEのアルバムで共有してみる。



#### つつぐち・なおひろ

1971年生まれ。「芸術新潮」カメラマン。幼い子供を写した箱いっぱいのネガフィルム。なつかしいイメージは頭の中に残っているから、気に入った紙焼きのみ残しておけばよいのかなと話合っています。

調布から西武園へ

筒口直弘 カメラと歩く 7

踏

切が上がるのを待っているとき、となりで息子が「お…、ち…した…さい」とブツブツ言う。

「それは、おまちください、だよ。しばらくおまちください」と教えてあげると、「なんで、くください」は「く…」って漢字？」と問う。

さらに問われる。「街にも駅にも「下さい」ばかり書いてあるの、なんで？」

小学校に入る前、文字を覚える気が全くなくて、心配だった。「だってお母さんに読んでもらえばいいじゃん？」なんて、甘えたことを言っていた。

最近では、漢字も少しずつ読めるようになってきて、うれしそう。

放課後の学童クラブでは、漫画を読むのがたのしいらしい。『鬼滅の刃』と『ドラゴンボール』。

『ドラゴンボール』  
「ってさ、あつちこつちに  
「ニヤニヤ」って書いてあるんだよ。多すぎるんだよね  
「ニヤニヤ」という  
感想。わたしの頭には、  
ニヤニヤしているスケベ  
な亀仙人の顔がうかがぶ。

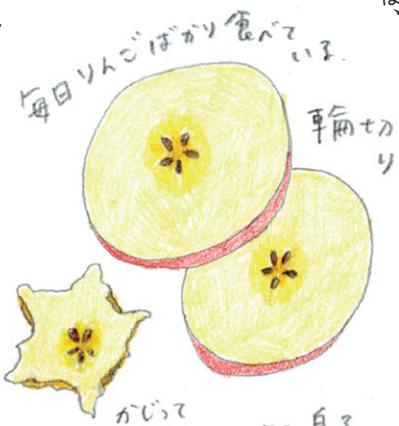
我が家の食卓の、息子の視線の先にはちようど本棚があり、夕飯を食べながら、またブツブツ言う。

「ニユー…ヨーク…で、…え、なか」  
近藤聡乃さんのエッセイ漫画『ニユーヨークで考え中』。

読んでみたいと言うが、漢字が多くてルビもほぼついていない。「お母さんが読んでよ」とせがまれて、寝る前に読み聞かせすることになった。

でも、漫画を音読する、しかも読み聞かせするって、なんか変じゃないか？と思うわたし。

「漫画は人に読んでもらうんじゃないくてさ、自分の心の中で読むのがたのしいんだよ」と文句を言うと「だってこ



あかぼえ・はるな 1985年、長崎県生まれ。愛知県立芸術大学卒業。2010年にピークファイックス入社。2017年9月出産。お正月休みは九州に帰省予定。息子は「早くこたつに入りたい」と言ってます。

## 漫画の読み方

赤波江春奈

### my kid's diary 10

の漫画は、女のひとが描いたんでしょ？ お母さんの声で読んだ方がリアルじゃん」。

えー、うーん、なるほど。

リアルって言葉、どこで覚えたんだろうなあ。

近藤さんのニユーヨーク生活を描いた漫画を、夜な夜な声に出して読む。これはこれで、けっこうたのしい。

横から「それってどういう意味？なんでこの人はこんな顔してるの？この絵はどういうこと？」とこちゃこ

ちや言う息子。だからさ、漫画は自分の心の中で読んで、自分で考えるのがたのしいんだってば。

4巻まで出ていいうちの、2巻まで読み終わったところ。

息子が得意気に言う。

「ぼく知ってるよ。漫画のモクモクってした形のところは心の声で、ふつうの丸のところは、しゃべってる文字でしょ」

「へー、ちゃんと知ってるんだ。学童の先生に教えてもらったの？」と尋ねると「そんなの教えてもらわなくても、自分で

わかった」んだそうだ。

たしかに、漫画の読み方なんて誰にも教わらなかつたかも。

「お母さん、他にどんな漫画持ってる？ なんかおもしろいのある？」

「まずは手塚治虫と水木しげるかな！それから…つげ義春もあるけど、それは君にはまだ早いな…！」と鼻息荒

く、熱くなってしまうわたし。

「それって、ほんとにほんとに、おもしろい？」と疑う息子。

「おもしろいに決まってるじゃん！」とさらに熱くなり、はじめて『ブツダ』を読んだ時の衝撃を、語り出す母。ちよつとだけうつつとうしそうな顔をされてしまい、反省している。